

保育を学ぶ学生たちのコミュニケーション能力を高める学び

— ころとからだを開くことを中心に —

A Study of Improvement of the Communicative Competence of Students in Childcare Training School:

Focusing on Opening the Mind and Body

照屋 洋

TERUYA, Hiroshi

キーワード：ことば、コミュニケーション、身体（からだ）、表現、保育者

1. はじめに

20年ほど前、ある地域の教育委員会が主催しているカウンセリング研修会に参加した時のことである。

講座に先立ち、その研修会を行っている研究所で1年間学校現場を離れて勉強している先生のワークショップがあった。参加者の緊張をほぐし、講座が活発な学習の場になるよう、アイスブレイクとして行われたものであった。

「歩きながら、出会った人と挨拶してください。」

「今度は握手をしてください。」

「自己紹介してください。」

次々と指示が飛ぶ。

しかし、緊張がゆるむはずのワークに参加しながら、かえってからだが固くなっていくのを感じた。ようやくからだがほぐれてきた、挨拶や握手にも緊張がとれてきた、と感じ始め、これからというタイミングで、次の指示が出される。参加者同士話し始めたところでストップがかかる。参加者からも「えっ!？」という声が漏れた。

見ると、指示を出していた先生は、参加者を見ていなかった。ただ、ひたすらストップウォッチを見て、30秒経ったから次の指示、という感じに進めていたのだ。

そこには、現場に立つものが最も大切にしなければならない、他者と向き合い、受容し、共感する、ということが欠けていた。どんなに優れたスキルを学んだとしても、こどもたちを見、感じ、自分の頭で考える力と感性を身につけなければ、保育現場や教育現場で仕事をする時、壁にぶつかるばかりだろう。

数年前まで中学校の現場にいた私は、ここ10年ほどの

間に、教育実習に来る学生が変わってきていると感じていた。

実習期間中は、毎日その日の振り返りを実習生にしてもらう時間がある。かつては、授業の進め方や子どもたちとかかわっていく中で見えてきたものを話題にし、翌日の実習につなげていったのだが、近年は、生徒とどう関わっていったらいいかわからない、生徒が話しかけてくれないから教室の中にいづらい、と訴える学生が増えてきた。私が退職する最後の5年間で、実習1～3日で「不登校」になった実習生が2人いた。このことは、どう考えたらいいのだろうか。

きちんと単位をとり現場に実習に来たのだから、さまざまな学習をし、指導法も学んできたのだろう。こどもたちをどのように観察し、どんな言葉かけが大切か、場面に即したスキルも勉強したに違いない。

では、何が足りなかったのか。

ある放送作家がこんな経験を話していた。

ドラマの撮影現場で昼休憩に30人分のハンバーガーを買ってくるようになった。アシスタントの二人が、あるファーストフード店に行き、30個のハンバーガーを注文すると、店員から「店内ですか?」(店内で食べるのですか?)と聞かれたという。

たった二人で30個のハンバーガーを食べるわけがない。そこにはただ「店内ですか?」と聞くマニュアルが存在しているだけで、店員にとって向き合うべき「他者」である客の存在を彼は全く感じていない。

おそらく彼は一所懸命マニュアルを学び、それを忠実に実行しようとしただけなのだろう。しかしそこには、一番大切にしなければならない客の存在がない。ここでの店員と客との間には、ただ記号としての言葉が飛び交うばかりで、相手を感じる「からだ」を持った人間同士

のコミュニケーションにはなっていない。

何かを見たり聞いたりしたとき、からだの深いところで感じ、からだが変わり、声にことばを載せて相手に届けようとする。コミュニケーションは、この主体としてのからだがあって成立するはずのものなのに、辞書にあるような意味を伝達するだけの役割でことばを扱うのなら、感じるからだはどこか遠いところに追いやられ、きちんと他者と向き合うことなど出来ぬままだろう。

これらのことは、今の社会だからこそその問題と言えるものなのかもしれない。きちんと相手と向き合うコミュニケーションよりも、機器を通した「会話」が当たり前になり、自分の頭で考えなくて済むマニュアルだらけの現代、他者とどう関わっていけばいいのか分からない人が増えているのも当然のことなのかもしれない。

しかし、保育現場で子どもたちに向かう大人のからだ、他者と向き合えないようでは困る。養成校時代、いくら素晴らしい授業を受け、たくさんの知識を持ったとしても、コミュニケーション力が低ければ、子どもたちを受け止めることは難しいだろう。閉じたからだで子どもたちの前に立ったら、子どもたちは受け入れてもらえていないと感じ、子どもたち自身の自己肯定感や自尊感情が育っていかないだろう。

開かれたからだで他者ときちんと向き合うこと、子どもたちの深いところで起きていることに目を向け感じる豊かな感性を磨くこと、相手を受け止め、共感し、適切な援助が出来る、しなやかなからだのことばを獲得することは、保育者を目指す学生たちにとって、とても大切である。

では、保育者養成校で、こうした課題に答えるためにどのような授業を展開していったらいいのか。

本稿では、保育者を目指す若い学生たちが、15回の授業の中で何故「からだ」が開かれていったか、具体的に授業で行ったワークをいくつか挙げながらその試みをまとめていきたい。また、気持ちを受け止め、適切な援助となることばを持つことについてもふれながら、その根底にある「からだ」の問題について考えていきたい。

2. からだのレッスンが必要であること

保育者養成校で身につけたスキルと専門性を、現場で求められる実践力として生かすためには、学生たち自身が、豊かなこころや他者を受容し共感する力を根底に持たなければならないだろう。

しかし、ともすると、知識や技術の獲得ばかりに目を向け、子どもたちに寄り添い、深いところで起きている

ことを感じる「からだ」作りが後回しになることは少なくない。

そのことは例えば、現場での表現活動の場面に結果として現れてくる。

私は長く演劇教育に携わっているおかげで、小中学校や幼稚園の文化行事、発表会に立ち会うことがある。そこでしばしば目にするのは、観客（保護者）に見せることを第一の目的にしているため、保育者が動きを決めていたり、一歩前に出て大きな声で話させたりと、およそ子どもたちの自由な表現から離れた指導が行われている場面だ。子どもの表現活動を秩序立てたものにするのを目標にし、技術的な指導にこだわると、子どもの深いところで起きているドラマ——感じ、考え、自分なりの表現を創りだそうとしている思い——に目を向けることを忘れてしまう。おそらくそこには、指導者自身の、劇とはこういうものだ、表現とはこうあるべきだ、という誤った認識や、そこで子どもたちのからだにどうということが起きているかを感じる力がまだ十分でないということがあるのだろう。「技術」の指導は幼児期にさほど必要ではなく、あってもあくまで方法であって目的ではないのである。こうした認識が先行すると、日常の活動の中でも、指導者は、子どもたちの、時に無秩序で粗野な動きにまゆをひそめ、「ととのえる」ことばかりに懸命になるという間違いをおかす。

自由な表現を受け止めてもらえなかった子どもたちは、画一的な表現を正しいと思い込み、表現にも「正解・不正解」があるかのような考えを持ってしまうことにもなりかねない。そして、自分に自信が持てず、自由な表現に抵抗を持ち、「違う」他者をうまく認められなくなる場合も出てくるのではないか。これらのことは、学校現場でしばしば問題にされる自己肯定感の低さにつながっていると考えるのは、短絡的であろうか。しかし、中学校の現場で実際に、他と違うことや違うことをすることに恐れを持ちやすい生徒と接すると、幼児期の学びに課題があったことが見えてくるケースにしばしば出会う。

子どもの頃から異なる性質を尊重して受容する環境にいれば、大人になっても多様性を認め、違ったものを受け止めることが出来るだろう。そして、そうした環境を作るのは、保育者ひとりひとりなのだ。

だから、保育者を目指す学生たちには、自由で、さまざまな個性を受け止める開かれたからだで現場に立ってほしいと願うが、残念ながら「表現するのは苦手」「自由にすると、どうしたらいいか分からない」「みんなと同じことをする方が安心」と考えている学生たちは少なくないのだ。

この課題を解決——自由で開かれたからだを獲得——

するために、私は『クリエイティブドラマ（身体と表現）』の授業で、次のようなからだを動かす作業を続けた。体験的に学ぶことは、より深い理解につながり、その人自身が変わっていくということを、学生たちの感想やアンケートから検証していきたい。

【GO→STOP→ポーズ】

- ① 初めは体育館全体を自由に歩いている。
- ② 合図で走る。（以下、「合図」は省略）
- ③ 止まる。（その瞬間の形でポーズ）

これを何回か繰り返した後、③で自由なポーズを作ってもらおう。

さらに、ポーズの前に指導者は課題を出してその形を作ってもらおう。例えば、「石」「車」「東京タワー」、慣れてきたら動きを入れて「ライオン」「魚」「へび」等々。

「パン」を課題にした時、そのままの形をキープしながら、他の人たちがどんな形を作っているか見させ、感想を言ってもらった。

「いろんなパンがあっておもしろい。」「同じクロワッサンでも全然違う。」「聞いてみて始めて何のパンだか分かるものがあるが、あーと納得する。」「みんな違うところがいい。」

じゃあ、どれが「正しい」パン？ と聞くと、そんなのではないと返ってきた。

つまり、表現に「正解・不正解」という言葉はなじまない、とおさえたところで、今度は「花」を課題にし、同じようにそのままの形をキープしながら、他の人の形を見てもらった。

「けっこう、みんな似ている。」「何パターンかに分けられる。」「種類が少ない。」

なぜ、こういうことが起きてくるのか。もっといろいろな花があってもいいのではないか。それを聞くと、そういう発想しかわかなかった、と言う。

私が小さな子どもたちにこの課題を出したとき、小さく固まった子がいた。何かと聞くと、つぼみだと言う。顔を手で広げ、「赤い花」を表現している子もいた。他にも実にさまざまで、大人ではおおよそ考えつかないような形も多く、子どもたちの感性と自由な表現には本当に驚かされる。

それが、どうして年齢が上がっていくにつれて「パターン化」していくのだろう。

おそらく、成長していくどこかで、「花」とはこういうものだ「正解」を教え込まれ、違うことをすると修正させられていったのだろう。現に、子どもたちと舞台を創っているところに立ちあった時、「それじゃあ花に見えない。」と指導している場面を見た経験がある。子どもの自由な表現や可能性を潰してしまっていると感じて、学

校で舞台を作ることの意味は何だろうと考えてしまった。

授業でからだのレッスンを繰り返していくと、初めはどんな形をみんなは作っているのか気になり、自由でなかった学生たちも、しだいに「これでいいんだ」「人と違うことがあたりまえなんだ。」「自分の感じたとおりを表現することで構わないんだ。」とわかっていき、自由になっていく。と同時に、「違う」他者を認めていくようになる。

これはとても大切なことで、保育の現場で子どもたちの個性を認め、いろいろな表現を応援していくことにつながり、こどもたちも、受容され承認される経験を積んでいくことで、自己肯定感が高まり、からだが開かれて、自由な表現を楽しむようになる。

以下、この授業についての学生の感想を挙げる。（以下、学生の感想や言葉は、〈 〉で表す。）

〈人間は、ある程度大人になると固定概念がうまれます。お花と言ったらこの形、猫と言ったらこの動き、というように、ほぼ全員が似たような表現をすると思います。でも、私はこれじゃつまらないなと思うのです。個性を大切に、また、相手の個性も認めてあげることが大切だと思います。身体を使って表現することは、とてもおもしろい私は考えます。身体を身体と思わないことだって出来るし、いろんなものに变化できます。人の考え方や想い、発想もそれぞれなので、『GO→STOP』の好きなポーズをとる授業のとき、みんなのことは見たら、個性があってもおもしろかったです。身体と表現のおもしろさを、こどもたちにも伝えていきたいなって思いました。〉(O子)

このように、座学で例えば、「個性を認めましょう。」「一人一人みんな違うのです。」と学んでも、なかなか深まらないことが、からだのレッスンをすることで深まっていくことは少なくない。これは、座学を否定しているのではなく、座学ではおおいきれない部分からだからのアプローチが有効なのではないか、そしてときには連携させていくことも必要なのではないか、ということである。

幸い今年度は関連できる二つの教科を受け持っていたので、常につながりを意識した授業を行うことが出来た。例えば、『国語（ことばとコミュニケーション）』の授業で、「コミュニケーション」とは相手を思いやることだ、という学習をしてもまだまだ浅い理解であったので、それを深めていくためのワークを『クリエイティブドラマ（身体と表現）』の授業で行った。

【お手玉キャッチ】

7~8人で円を作り、1人1つずつ持ったお手玉を投げ隣へ移動、隣の人のお手玉を受け取る。全員が同時に取れるまで続ける。

続けていくうちに、どのグループも成功するようになる。成功した理由について考えさせ、シェアし合うと、「初め、取ることばかりに懸命になっていたけど、相手のことを考えて投げるようにしたらうまくいった。」という答えが返ってきた。これをさらにいろいろなことに広げて考えるよう促すと、『国語(ことばとコミュニケーション)』で触れたコミュニケーションの問題に気づくものが出てくる。

〈相手のことを考えて、どうすれば伝わるのか考えて、自分中心のやり方ではなく、相手を思いやる気持ちが、相手に自分の思いを伝えられる1つの方法なのではないかと思う。〉(I子)

座学で学んだことが、からだのワークをすることで深まっていった一例である。

3. 開かれたからだへ

私が新卒で中学校の教師になって3年目、クラスも授業も部活動も何もかもうまくいっていたように見えていたのだが、実際は、本当に子どもたちと深く向き合っているのだろうか、私自身、疑問を持つようになっていた。

特別困ったことがあったわけではないのだが、時折、自分の発したことばが子どもたちに届いていないのではないかと、彼らのいろいろな思いを本当に受け止めていないのではないかと、思った、「ほんやりとした」不安だった。それは、頭で考えたことではなく、からだで感じていることであった。

そうして私は、竹内演劇研究所(竹内敏晴主宰)に通うようになった。そして、「からだ」の問題に気づくようになったのである。竹内の書いた『ことばが劈かれるとき』(思想の科学社1975年)を読んだことと、研究所のパンフレットのことばが、私に入所することを決心させた。

そのパンフレットには、つぎのようなことばが書いてあった。

- ひとにふれられないからだに気づく
- 自らのからだのこわばりに気づく
- からだをときほぐす
- からだの内に動くものを感じる
- 感じるままに動く

- ものにふれる
- ひとにふれる
- 他者に向かって働きかける
- こえで働きかける
- ことばで働きかける
- からだ全体が深くいきいきと動く

私は、いろいろな問題をこの「からだ」という視点で捉え、授業を進めている。

保育の現場は、日々、正解のない問いばかりである。こういう場合にはこういう対処の仕方がある、といった、ある種の方法論では処しきれないことの連続だ。こと対人関係においては、完璧なマニュアルなど存在しない。知識や技術を学ぶことは当然必要だが、それを現場でどう生かすかは、保育者の、相手を受け止め、その場の状況や相手の状態を感じ取る力にかかっている。

同じ学びをし、知識も技術も同じように身につけたはずなのに、いざ現場に出てみると、それをうまく仕事に生かせる人と生かせない人がいるのはなぜなのだろう。長く中学校の現場にいた私は、新採用で入ってきた若い教員や、優秀な成績で教育実習に来た学生たちを見て、こうした疑問を持つことがある。

知識を生かすスキルがまだ足りないということもあるだろう。経験を積みれば解決する話でもあるのかもしれない。しかし、私は、相手をからだまるごと受け止める開かれたところとからだを、彼らはまだ持ち合わせていないのではないかと考えている。

まずは、保育者自身が開かれたからだで子どもたちと向き合い、豊かな感性で受け止める力を身に付けることが必要だろう。そうして初めて、学んできた知識や技術を使って、適切に援助していくことができるのだ。

『クリエイティブドラマ(身体と表現)』の授業では、当初学生たちは劇を創る授業だと思っていて、初めから私に「人前で何かするのは恥ずかしくてやりたくない。」と訴えてくるものも少なくなかった。全体に聞いてみると実に多くの学生が、「表現」することに抵抗を持っていた。「恥ずかしい」「緊張する」「相手の目が見られない」「何かをやったとき、変なふうに思われるのではないか。そう考えると何も出来ない」など、さまざまな訴えを聞いた。

小さい頃「ごっこ遊び」をしていた彼らはいつ、どこに「やわらかなからだ」を置いてきてしまったのだろう。

『クリエイティブドラマ(身体と表現)』の授業の第1回目で、私は学生たちに次のようなアンケートをとった。

[大丈夫] ← 1 2 3 4 5 → [緊張する]

と書かれた用紙を配り、

「自分の感覚でいいので、自分は人前でどれくらい緊張するか、どれくらい自由に開かれているかを記入してください。緊張が強いほど大きい数字に○を付けてください。あまり緊張せず、表現することに抵抗が少ない人は、小さい数字に○をしてください。」と指示を出した。

結果を集計すると、

1…3人、2…17人、3…17人、4…18人、5…19人であった。ただ、1と2の間、2と3の間というふうにつけた学生たちもいるのでそれを「1.5」「2.5」…とすると、

1.5…1人、2.5…3人、3.5…2人、4.5…9人であった。

15回目の授業でもう一度同じアンケートをとってみると、結果は、

1…23人、2…29人、3…16人、4…10人、5…0人であった。また、「1.5」「2.5」…の人数は、

1.5…5人、2.5…2人、3.5…2人、4.5…0人

さらに1人は「0（ゼロ）」を作り、そこに○をつけていた。このことを回答した本人に尋ねると、表現することに抵抗がないので初めの段階で「1」をつけたが、授業を受けてそれ以上になった（表現することが楽になった）、という意味だと言う。（1回目と15回目で合計数が異なるのは、欠席者がいたためである。）

結果は顕著である。ひとりひとり、1回目と15回目を比較してみると、初めより緊張度が増したものは0であった。最初と最後が同じ数字のものは6人いたが、彼らは初めからそんなに緊張しない学生たちであった。（「1」が3人、「2」が3人）

15回目が終わる時、学生たちには、15回を振り返っての感想を書いてもらった。その中で、自分が変わった、からだが自由になった、と感じている学生たちの感想をいくつか紹介する。

〈初めてこの授業を受けた時、みんなの前で発表したり発言したりすることが多そうで少し嫌だと思っていた。私は人前に立つことが苦手なので、授業の中でしっかり発表できるのか不安だった。人見知りでもあり、班（注・この授業を受けているクラス）の中でも普段あまり話さないような人ともコミュニケーションをとることも私にとっては難しいことだった。しかし、今は最初の時ほどこの授業での発表は辛くない。〉（I子）

〈最初、私は極度のあがり症で人前に出ると手が震えたり、頭の中が真っ白になったりしていました。保育者に向けてないんじゃないかと思うほどでした。でもこの授業での発表を繰り返していくうちに、人前に出ることに慣れてきたと感じました。まだ、完全に治ったわけではないですが、前で発表した時に、最初はと

りあえず前に出て話をすればいいやと思っていました。しかし、慣れていくうちにどうしたらクラスの人たちに伝わりやすいかなとか、もう少し大声でしゃべったほうがみんなに伝わりやすいとかを考えるようになりました。こういうふうには経験を積むことによって、最初は保育者に向けていないと思ったことも、今ではこどもたちと一緒に成長していきたいと思うようになりました。このドラマの授業のおかげで、前に出ることも慣れ、保育者になりたいというやる気がさらにましました。自分の声や表現で子どもたちに影響を与えられるような先生になりたいと思いました。〉（Y子）

〈人前で何かを発表することが楽しく感じました。絵本の読み聞かせで、皆の反応が見れた時は嬉しくて、今までマイナス思考だった自分から少し変わったと思います。また、ワークをしていく中で相手をちゃんと見ることが出来るようになりました。自分だけの表現で精いっぱいだったのに、他の人の動きや表現を見て、周囲ではどんなことをしているのか把握する力がついたように感じます。ある程度自分に余裕がないとできないことだったので、緊張することが少し減ってきたからかなと思いました。〉（A子）

授業の中で行ったワークは次のようなものである。ワークの詳細は別の機会にまとめることにして、今は簡単な紹介にとどめる。

- ・「自己紹介」みんなの前で3つのことを伝える。緊張する自分に気づく。
- ・「バースデーサークル」誕生日順に並ぶ。知らない人とも話しをしないと並ぶことが出来ない。
- ・「進化論ゲーム」ジャンケンで勝っていくと進化していく。たくさんの人とジャンケンする必要がある。
- ・「共通点と相違点」4人組。たくさん話さないと、見つけられない。
- ・「2人ペアの鬼ごっこ」誰かの隣に行くことでつかまらない鬼ごっこ。誰かを選んでいない暇がない。
- ・「アイコンタクトのいす取りゲーム」アイコンタクトだけで席を交換する。みんなをよく見る。
- ・「無対象の大縄」縄がないのに、全員（30人ほど）と一緒に跳ぶ。縄があるように見える。
- ・「お手玉キャッチ」（前述）
- ・「だるまさんの1日」鬼が、「転んだ」以外の言葉を投げかけ、みんながそのポーズや動きをする。
- ・「GO→STOP、ポーズ」（前述）
- ・「絵本の読み聞かせ」全員の前で絵本を読み聞かせる。
- ・「ミラーリング」2人組。相手の真似をする。
- ・「魔法の手」相手の手に合わせて動く。

- ・「彫刻と彫刻家」彫刻家が彫刻役の人を動かして、彫刻を創る。
- ・「仲間作り」リーダーが指定した条件の人を探し、集まる。
- ・「2人組で彫刻」2人でポーズ。
- ・「4人組で彫刻」4人で順番にポーズ。
- ・「ポーズからの創作ダンス(4人組)」それぞれのポーズを組み合わせて、つなげてダンスの振り付けを創る。
- ・「寸劇作り(課題にあわせて)」指導者の指定した条件で無言劇を創る。(寸劇は4~6人)
- ・「寸劇作り(物の見立て)」指導者の指定した物を使って、いろいろな物に見立てて劇を創る。
- ・「寸劇作り(昔話から)」昔話から、静止画を4枚創る。
- ・「寸劇作り(立体紙芝居)」1人が紙芝居を読み、他のものが絵を創る。

私は15回の授業の中で、少しずつ「他の人たちを見る」という時間を増やしていった。初めの頃は、特別に「見る」時間を作らず、同じタイミングでお互いを見るチャンスを作る程度にしていたが、抵抗がなくなってきたのではと思えるようになった6回目あたりからは発表の時間を作り、きちんと見せ合う(発表者と観客を分ける)ことをした。みんなに見てもらうことに抵抗がなくなってきたと感じるのは、発表者と観客の間に「コミュニケーション」が生まれ、見ている人たちに「受容」されたと感じている様子が窺えるようになったからだ。

相手からの「受容」を感じたとき、人はこころとからだが開かれ、自由になっていく。

〈(絵本の読み聞かせの時)みんな静かに集中して聞いてくれたし、読み終わったあと、あたたかい拍手をしてくれたので、緊張がほだけ、とても安心した。そこから人前に立つのが嫌でなくなり、少し緊張はするけど、楽しんで発表することが出来るようになった。〉
(W子)

〈自分たちが発表している途中や終わった後の、みんなの「おー」とか「すごい！」などの反応は、とても嬉しいし、やりやすさを強く感じる事が出来た。最初は人前での発表に対して恥ずかしさや抵抗があり、絵本の読み聞かせや4人組みでポーズをつなげてダンスにしたりする作業で思い切り自分を表現することはできていなかったと思う。だけど、A班のみんなはとても優しく、温かい雰囲気で見守ってくれたり、恥ずかしがらずに一生懸命キレキレポーズを発表したりしていて、自分が恥ずかしいと思っていたことが、こんなにおもしろくてかっこいいことなんだと気がつい

た。(中略)みんなが発表しやすい温かい空間を作ること大切にしたい。〉(R子)

この受け入れてもらったとき自分のからだが自由になったという経験は、保育の現場での「受容」の大切さを体験的に学習したことになる。『クリエイティブドラマ(身体と表現)』の授業では、しばしば、頭の中で学んだことが体験によって自分の中にストンと落ちる場面に立ち会うことが出来、からだを動かして学ぶレッスンの有用性を強く感じる。

〈幼稚園の先生や保育士になった時、こどもの目線や考えていることも、この授業を通してからだで実感することができました。〉(B子)

〈言葉だけでは分からないことを身体で表現することによって学ぶことができるのが、この「身体と表現」なんだと分かりました。そして、人それぞれ表現することが違って、個性を見ることができるとも思いました。〉(Y子)

4. からだを語る豊かな言葉を持つということ

からだを開く



相手がどんなことを感じ、考えているか、を感じ、考える



適切な援助をする

保育者のこうした活動のプロセスの中で、からだを開くこと、相手をからだまるごと受け止める感性の大切さをここまで述べてきた。この最後の「援助」の部分で、学生たちにつけてほしい力として「言葉」がある。

言葉をあまり持たないこどもたちは、それでもいろいろな形で自分を表現している。ただ泣くだけであったり、抱っこをせがんだり、時に部屋から出てこないときもある。そうしたこどもの気持ちを、保育者は開かれたからだで受け止め、わかってあげようとしたとしても、保育者の仕事はもちろんそれで終わりではない。

彼らの気持ちを代弁した言葉をうまく使い、受け止めていることを伝える。こどもたちは、わかってもらえている安心感を持ち、癒され、言葉を覚えていく。

保育者の言葉で、こどもたちは気持ちを伝える言葉や、他者とのコミュニケーションに必要な言葉というものを理解していく。

ひとつの事例を見てみよう。

今年度の『基礎ゼミ』の授業¹⁾で、次のような動画を見た。この『基礎ゼミ』を受けている学生と『クリエイ

ティブドラマ（身体と表現）『国語（ことばとコミュニケーション）』を受けている学生は、全員同じ1年生である。

・1歳児クラス、テラスでの自由遊びの時間。H君がボールと泡だて器を使い、「紅茶」を「ませませ」している。

保育者は、ミルクも入れてね、と声をかける。H君は、ミルク入れたよ、と返す。

一方、T君は、ティーポットに水を入れ、花に水遣りをしていたが、H君のところへ行き、無理やり泡だて器を取り上げ、抵抗しているH君の頭をティーポットでたたいてしまう。

保育者は、「ひどいねー。」「でももう少し待ってみようか。きっと返してくれるよ。」

すると、T君は落ちていたティーポットに水を入れ、H君に渡してあげた。

保育者が、「あ、とりかえっこか。H君、とりかえっこだって。」と言うのを聞いて、H君も泣くのをやめ、そのティーポットで遊び始めた。

この動画を見た後の学生たちの観察記録と感想は、次のようなものであった。

〈泣いてしまったH君を見て保育者は、H君の思いや気持ちを代弁する。また、T君がどんな思いで泡だて器を取ったのかH君に言い聞かせるよう、T君の思いも保育者が代弁する。こうすることで、互いの思いを理解し、「そうだったのか!」と反応することが出来る。また、その思いをお互いに理解したのか、T君がH君に泡だて器ではなくティーポットを渡す。「なぜ?」と思ったH君だったが、保育者の「T君がポット貸してくれるって。とりかえっこだ。」と声をかけることにより、H君も納得したのか、T君がさっきまでしていた遊びを始め、T君もH君がしていた遊びを始める。H君はそのあと、「とりかえっこした。」と言葉を繰り返していた。〉(Y子)

〈保育者がこどもにわかりやすいことばで代弁してあげていた。そうすることでこどもは、感情の名前を知ったり、コミュニケーションの取り方を学んだりするのだとわかった。そのためには、こどもが理解しやすい簡単な言い回しや的確なことばを学び、すぐさま口に出せるようにしなければならないと思った。〉(F子)

こどもたちは、自分の気持ちを受け止めてもらえたと思える言葉、仲間や大人とコミュニケーションがとれる言葉を、保育者の言葉から学んでいく。だから保育者は、難しい言葉ではなく、こどもたちが深く受け止めることの出来る言葉をたくさん持っておかなければならない。

観察し、気持ちが理解できたとしても、こどもにとって理解できる言葉を保育者が投げかけるには、保育者自身の言葉の問題があるだろう。それは技術ではなく、保育者自身の豊かな感性とそれを適切に表す言葉を「練習」によってたくさん学んできたかどうかだ。そうした言葉を学生たちが獲得するために、言葉を単に「辞書にある意味」として覚えるのではなく、そこにある「感覚的なもの」を一緒に学ぶことを進めていく必要がある。

平田オリザは、これを「暗黙情報」という言葉で説明している。これは、平田の造語である。

—「暗黙情報」というのは、一言でいえば「言語・数値などで伝えられない情報」ということです。これに対し、「言語・数値で伝えられる情報」を「形式情報」と呼びます。

リングがあったとします。リングであること、個数、グラム数などは、「形式情報」として、簡単に他者に伝えることができます。しかし、味や香りなど、食べた匂いだりすればすぐにわかるのに、それをしていない他者に伝えることが非常に困難な情報があります。これらを「暗黙情報」と呼ぶわけですが、少し想像していただければわかるように、世界を形成する情報の中でも「形式情報」として伝えられるものはごくわずかで、後は膨大な「暗黙情報」なのです。

「コミュニケーション」という言葉を「情報の相互伝達」と訳せば、その情報の大部分が「暗黙情報」である以上、コミュニケーション能力の中でも「暗黙情報を扱う能力」が極めて重要であることがわかります。(中略)

例えば、論文にまとめるというのは「形式情報化」する、ということです。ですから、「暗黙情報」を扱うのには適していません。それこそ膨大な文字量になってしまいます。

戯曲はこれに対して、暗黙情報を暗黙情報のまま、セリフなどの形式情報とうまく組み合わせ、いかに観客に伝えられるかというミッションで書かれています。優れた小説も同様に、いわゆる「行間」に膨大な「暗黙情報」が込められていて、読者に感動を与えます。(平田オリザ²⁾) —

そして平田は、「演劇を作るプロセスの中から、有用な要素を抽出し、短時間で実施できるようにしたものが、演劇ワークショップ」であり、「演劇力の向上が、コミュニケーション能力の向上につながる」と述べていく。

私は、30年以上にわたって学んできた「演劇」と「演劇教育」を活かして、学校現場で演劇的なワークを行い、子どもたちの感性や表現力、コミュニケーション力を伸

ばす試みをしてきた。その結果、不登校の生徒が学校に通えるようになったり、クラスからいじめがなくなったり、自己肯定感や自尊感情、他尊感情が育まれるなどの効果も数多くあった。

そうした経験から、私は、『国語（ことばとコミュニケーション）』の授業、『クリエイティブドラマ（身体と表現）』の授業を連動させながら、より効果的に学生たちが学ぶことの出来る教材とからだのレッスンを考えてきた。

平田は、「コミュニケーション能力は、決して特別な能力ではありません。誰もが生来、素質を持っているものであり、場数を踏んで、成功体験を重ねることで、その力は向上します。」(平田³⁾)と、コミュニケーション力をつけるためにはたくさんの練習が必要だと言っている。そして、「場数を踏んで成功体験を得るために二つの方法がある。」と述べ、それは「理論化」と「シミュレーション」だという。その両方を兼ね備えたものが「演劇」であると説く。

この言葉を借れば、私自身これまで学び作り上げてきた演劇のワークを生かして、「理論化」を『ことばとコミュニケーション』の授業で、「シミュレーション」を『身体と表現』の授業でつながりを持たせながら今後も進め、その都度検証しながら、より効果的なレッスンを考えていきたいと思う。

最後に、学生たちの学びを彼らの言葉から見ておきたい。

〈普段の授業なら言葉だけで相手に伝えることが多くあるけれど、この授業は身体を通して相手に表現することができます。(中略) ポーズ (のワーク) 1つでも皆それぞれ個性があって、自分らしさを出せた授業では、他の人と自分がその1つの物に対してどう感じているのか身体を使って理解することができたので、心＝行動 (身体での表現) だなと思いました。(中略) 私たちは日常生活の中でいつも自分を表現して生きているのかなと考えました。〉(A子)

〈この授業のおかげで、自分に少し自身が持てるようになって、人前でも自分の思いを話せるようになって、本当に良かったです。〉(B子)

違うことはいいことと分かったとき、緊張しなくなったという学生も多い。

〈周りとは違う自分を表現していくのが楽しく感じ、相手に何かを伝えたり、発表したりすることが辛いと思わなくなったんだと思います。11回、12回の言葉を発しない発表の時には、不思議と緊張もしなかったの

で、改めて意識してみると自分は少し成長したなと実感することができました。〉(K子)

『クリエイティブドラマ（身体と表現）』の授業では、こどもたちときちんと向き合い、こどもたちの自由な表現を受容し共感できる「からだ」を持つために、まずは自分のからだに気づくことから始めた。この「気づく」ということがとても大切で、この感覚が次の「表現したい」「表現する」の動機となり、またそこから新しい「気づき」が生まれる。この繰り返しが「成長したなと実感する」に至り、他者を受け止める開かれた自由なからだを獲得することにつながっていく。さらに『国語（ことばとコミュニケーション）』でコミュニケーションに必要な言葉について考えさせ、二つの授業を連動させながら表現の幅を広げていった。

どんな知識も技術も使うのは保育者自身である。学生たちには卒業後現場で生きるために、いろいろなことに気づく感性とたくさんの言葉を獲得し、本当の実践力をつけてほしいと願っている。

5. 終わりに

保育者を目指す学生たちが、単に保育の知識や技術、マニュアルだけを学んで現場に立つのではなく、相手を受け止める豊かな心とからだや相手に届く言葉を持って、こどもたちに向き合ってもらいたい。そのためにはどんな授業を展開していったらいいのか、ということが本稿で考えてきたことである。

「開かれた心とからだの獲得」は、数字で明らかにすることは難しい。最初と最後の授業で、「人前でどれくらい緊張するか、どれくらい自由に表現できるか」というアンケートをとり、学生たち自身の感覚で数字にもらったが、客観的でないという意味では今後の課題ではある。しかし、自身が「自由になった」と思えることが一番の前進ではないか。少なくとも、前よりも自信をもってこどもたちの前に立つことが出来るだろうということは想像に難くない。

授業後のコメントペーパーに書いてきた感想は、その授業で課題をこなし、その結果自分が変わってきたことを敏感に感じ取り、向上してきている自身を認める内容がほとんどである。そうした自覚こそが、授業の最も重要な目的のひとつであり、成果であると私は考えている。

「数字」を大切に、「正解・不正解」を学びの中心にしてきた高校までの学習は、「数字」で現せない、からだの深いところで感じる感性や、自己肯定感、自由な表現が出来る開かれたからだをどこかに置き去りにしてきたのかもしれない。まずは、本来持っているからだの感

覚を取り戻し、自尊感情、他尊感情を育み、その上で言葉を獲得していくことが必要であろう。そうして初めて、他者を受け止め、豊かなコミュニケーションが出来るようになるのだと考えている。

私自身、企業や教育現場の研修でコミュニケーション能力を高めるためのグループワークを依頼されることが多いが、近年、「からだで学ぶ」ワークショップが注目されている。そうした学びは、人と向き合う保育者、教育者こそ重要であると思う。

「これからの保育者養成機関に求められるもの」の中で、上田⁴⁾は、「保育士がその職を辞する主な理由」として4つ挙げた後、次のように語っている。

「保育士は日々の激務と人間関係、責任の重さに疲弊しているのである。その結果、保育への情熱を失ってしまうのである。中でも問題は人間関係である。(中略)このような保育士相互の人間関係を改善することなく保育所を増築し、待機児童対策を解消しようとするのは決して問題の解決には繋がらないのである。問題の解決には、養成校において、保育現場における基礎教育、なかでも『人間関係論』『グループワーク』『カウンセリング』『コミュニケーション論』といった科目を十分に教授することが必要である。」

職場での人間関係がうまく作れない、コミュニケーションが上手にとれないといったことから職を辞する保育者が少なくないことを考えても、相手と向き合い、受容し、共感するしなやかな感性を持った「からだ」のレッスンや豊かに表現できる「ことば」の学びを充実させることは、保育者養成校の急務の課題である。

保育者を目指す学生たちが、しなやかな「からだ」と豊かな「ことば」を獲得し、夢と希望と使命感を持って現場にいけるよう、コミュニケーションや身体表現の授業をさらに深めていきたいと思う。そして、授業で行っている内容をひとつひとつ検証し、体系づけ、誰でも取り組める「メソッド」作りをこれからの課題にしていきたい。

〈注〉

- 1) 授業者・青木弥生 「観察技法」の授業の中で。(平成29年11月7日、『基礎ゼミ』)
- 2) 平田オリザ『コミュニケーションを引き出す 演劇ワークショップのすすめ』p.130
- 3) 同 p.125
- 4) 上田 衛「これからの保育者養成機関に求められるもの」(『月刊 仏教保育カリキュラム 平成29年5月号』p.3)